ブダペスト日本人学校における現地校との交流実践

前ブダペスト日本人学校　教諭
大阪府豊能郡能勢町立東中学校　教諭　山　田　善　紀

キーワード：在外教育施設，ブダペスト，英語教育，国際交流

１．はじめに

私が赴任した2008年は，ブダペスト日本人学校開校４年目にあたる年だった。現地校（ヴィラーニョシュ校：以下Ｖ校と記す）の建物を借りて授業を行っているため，日本の学校のように学校専用の体育館やプールなどはない。全てＶ校との共同利用である。日本人学校とＶ校との体育館使用スケジュール調整においては，かなり神経を使った。教育委員会より週５時間の体育の授業を課せられているＶ校は，どうしても体育の授業を入れざるを得ず，自然と体育館や校庭を使う割合が多くなる。一方，日本人学校のカリキュラムも文部科学省基準を下回らないよう設定すると，どうしても体育館が使えない日も出てくる。夏場は暑く，極寒の冬場は両校体育館を使用したい気持ちが強くなる。当然，Ｖ校職員の中からは「日本人学校さえなければ…」というような声が出てきてしまう。

そのような中，Ｖ校にとって同じ敷地内に日本人学校があることのメリットを感じてもらいたい，と私は切に思った。小学校３年生より選択希望者のみ日本語の授業を行っている学校である。きっと親日的で，日本人や日本の国に対して理解のある教師，児童生徒が多いはずだと期待していた。また，元々ハンガリー人は日本人に対して友好的で2009年には日本・ハンガリー外交関係開設140周年の記念の年を迎え，友好行事も多数行われた。学校内でもこの立地条件のよい環境で両校が更に近しい関係になることはできないだろうか，と考えた。以下にその３年間の取り組みを紹介したいと思う。

２．ブダペスト日本人学校の概要

2005年３月にブダペスト日本人補習授業校を閉校し，同年４月よりブダペスト日本人学校開校となって以来４年目を迎える2008年に赴任した。児童生徒数は，小学部80名，中学部22名，合計102名と過去最多の児童生徒数を記録した。翌年から，減少傾向にあり赴任３年目には，小学部65名，中学部15名，合計80名となった。日本人学校の特色としては，小学部１年生から６年生までは，週１時間，中学部は週２時間の英会話の授業が行われていた。また，小学部３年生から中学部まで週１時間のハンガリー語の授業もあった。この語学教育は，在外教育施設の大きな特徴の一つとなる。また，地の利を活かして，現地校との交流も小学部１年生から中学部までそれぞれ，学年の実態に合わせて活発に行われるようになってきた。

３．３年間の現地校との交流の取り組み

(1) １年目

① 子どもの日交流会

Ｖ校との交流は，定期的に行われているものとしては５月の“子どもの日交流会”，“音楽交流会”，小学部５，６年生によるＶ校と合同で行われている体育の授業のみだった。初めて体験する５月の“子どもの日交流会”では，せっかく隣接するＶ校児童と触れ合う機会なので，私は小学部４年生の担任として，「５人の児童の名前を聞いてくること」との課題を出した。自分の名前の名乗り方「○○　ヴァジョック」，相手の名前の尋ね方「ホジ　ヒービャック？」，「クスヌム（ありがとう）」を練習し，交流会に参加した。

今回は，日本人学校の児童がＶ校の児童に折り紙の鶴の折り方を教え，できた鶴を持って，色々なブースで遊ぶと

いう交流会だった。色々なブースとは，「ストラック　アウト」「ヨーヨー釣り」「ゴムとび」「フェイス　ペイント」などである。Ｖ校の教師や７，８年生の生徒，日本人学校の教師，中学生が各ブースの担当となり，小学生を迎えた。ハンガリーの“子どもの日”は，男女関係なく子どもが主役となり，子どもが楽しめる日なので，教師が子どものために楽しい企画を立てて行われたものである。ここに，日本人学校とＶ校とが協力し合って１つの行事に取り組む素地があった。

② Ｖ校４年生との交流

私は，年にたった１度きりの交流会ではもったいないと思い，まずは，Ｖ校で日本語を学習している小学部４年生の児童との交流を試みた。日本語の教師は，ハンガリー人のヴィクトリア先生だった。大学卒業したての新任の教師だったが，非常に意欲的に私の交流の依頼に乗ってくださった。2009年２月が最初の交流会だった。必要アイテムは，名札である。お互いの共通言語は英語なので日本人学校の児童がアルファベットで自分の名前とＶ校児童の名前を書いたものを用意した。さらに，「アルマ（りんご)」「ナランチス（オレンジ)」「バナン（バナナ)」「グルグーデインニャ（スイカ)」の４つのグループに分け，である。日本人学校の児童はハンガリー語で，Ｖ校の児童は日本語でグループ名を呼ぶことにした。

第１回目の交流会は，グループ内での自己紹介から始めた。日本人学校の児童が，名札をＶ校の児童に渡す際に，「〇〇ヴァジョック（私は，〇〇です)」と自己紹介することとした。これが普段の休み時間でも普通に行われるようになると，この立地のメリットを実感してもらえるのではないかという期待を込めて。

両校お互いに自己紹介が終了したところで，フルーツバスケットのルールをヴィクトリア先生からハンガリー語で説明していただいた。ここは，日本語での説明では理解が難しいのでハンガリー語でスムーズにやっていただいた。

さて，いよいよゲームが始まると両校の児童とも「次は，どの果物が言われるかな」，などと気にしながら，オニになった人をしっかりと見ていた。オニになってしまった人は，それぞれ相手の国の言葉で果物の名前を言うようにして，楽しい雰囲気でゲームを終えることができた。Ｖ校の児童やヴィクトリア先生から，「ぜひ，またやりましょう！」というお誘いの声をいただいた。

第２回目は，２月だったので「百人一首」の札を使用して「坊主めくり」を行った。第１回目と同じグループのメンバーで日本人学校の児童がジャスチャーと英語を駆使して，一生懸命にルールの説明をした。何とか通じたグループから，ゲームを開始した。時々，ヴィクトリア先生のハンガリー語の通訳も入りつつ，こちらも楽しい雰囲気で終えることができた。

(2) ２年目

① 秋篠宮様・紀子様，現地校との交流の様子ご視察

日本・ハンガリー友好140周年記念の年，日本人学校とＶ校とが同じ敷地内にあるということで交流の様子をご視察されることになった。2009年５月19日，新年度が始まるとすぐに両校の教師と児童生徒が力を合わせて，お昼休みなどの時間を利用しての練習が始まった。両校の小学生がペアになり「茶摘」の手遊びをしたり，日本の歌「ふるさと」を歌ったりした。Ｖ校の児童生徒たちは，一生懸命に日本語の歌詞を覚え，上手な日本語で歌っていたのには感心させられた。

中学生は，Ｖ校生と和太鼓の演奏を行った。休み時間など，空き時間を見つけては，お互いに息の合った演奏を心がけ，一生懸命に取り組んだ。とても素晴らしい合同演奏になった。140周年記念の年にふさわしい交流演奏会だったと思う。

② 日本人学校小学部３，４年生とＶ校３年生との交流

日本人学校小学部３，４年生とＶ校３年生の日本語授業選択者との交流である。交流会のはじめは，１年目から試

みている，“フルーツバスケット”のゲームをアイスブレイキングとして行ってきた。フルーツバスケットのゲームの中には，交流会を楽しいものとするための様々なしかけや，ルールが含まれている。まず第一に，フルーツの名前でチーム分けを行い，名札を配布する際に，自分のチームのメンバーの名前を呼び，手渡しをして，握手をする。これで，交流の第一歩が始まる。第二にオニになった児童は，自分の名前を大きな声で言う。そうすることにより，その場にいる全員に名前を知ってもらえる。

次に“並べ替えゲーム”を行い，チームの団結力を更に深める。お題は，「１～10」の中で自分の好きな数字を頭に思い浮かべ，数の大きい順に素早く並んで座ったチームが勝ち，という簡単なゲームである。指を使ったり，ハンガリー語，英語，日本語が飛び交う。どの児童生徒も必死に自分の数字を相手に伝えようとしていた。今回も，「楽しかった！またやりたい！」という感想が，両校の児童から出た。少しずつお互いの距離が縮まっていくのを感じた。

③ 同学年で“花笠踊り”の花笠作り

お互いの距離が縮まったところで，日本人学校の一大行事であるドナウ祭（学習発表会）で小学部３，４年生が踊る山形県の民謡，“花笠踊り”の花笠をＶ校の，３，４年生と一緒に作成した。ドナウ祭で踊るのは，日本人学校の児童だが，一緒に花笠を作り，完成した花笠を使ってＶ校の児童に踊りを披露したり，教えてあげて，一緒に踊るところまでの取り組みを行った。身振り手振りで日本人学校の児童は，根気強く教えていたのが，とても微笑ましかった。また，Ｖ校の児童も一生懸命に理解しようとして，説明を聞いたり，見本を注意深く見ていた。

【Ｖ校児童とともに踊る“花笠踊り”】

④ 今度は，Ｖ校クリスマスパーテイーにご招待いただく

何度か日本人学校より“交流”の企画を打ち出し，実践していくと，今度はＶ校より「次は，Ｖ校の企画でクリスマスパーテイーをしますので，ぜひ来てください。」とのご招待を受けた。Ｖ校の教室の机には，手作りのケーキやドリンクが並んでいた。プレゼント交換では，Ｖ校の児童が，手作りのカギまでついている小さな宝物箱を用意してくれていた。その箱の中には，チョコレート２個が入っていた。また，日本人学校の児童は手作りのブンブンゴマを準備した。遊び方まで教えてあげ，とても和やかな雰囲気だった。ヴィクトリア先生からチームで協力して楽しむゲームを用意していただき，共同作業で取り組んだ。チョコレートの賞品もあり，誰もがとても張り切って参加していたのが，印象的だった。

(3) ３年目

① ヴァーロシュマヨリ高校生宅に半日ホームステイ

小学部の交流が軌道に乗ってきた中で，中学部２年生３名の担任，そして教頭職を兼ねながらの１年間でどのようにして，中学部生徒の交流を進めていこうかと思案した。ここで，中学生の交流に欠かせない方を紹介したい。以前，Ｖ校にて，日本語を教えられていたゲルゲ・ユーリア先生である。ユーリア先生は，Ｖ校を退職され，ヴァーロシュマヨリ高校にて日本語を教えられていた。彼女の熱心な指導は，とても評判がよく，Ｖ校を卒業する学生の中には，日本語の学習を更に続けるため，ユーリア先生のいらっしゃるヴァーロシュマヨリ高校へ進学する生徒もいる。以前より，日本人学校の中学生を高校生宅にホームステイさせてやりたい，とまで申し出てくださったほど日本人との交流に熱心でいらっしゃる先生だった。私は，その熱意に応え，中学生同士の交流を進めていきたいと強く思った。

最初から宿泊の伴うホームステイは，日本人学校の生徒も不安がるので，半日のホームステイはどうかと打診し

たところ，ユーリア先生の生徒の一人，ラウラさんのご家族が私たち中２生３名，校長，と共にお邪魔させていただくことを快く引き受けてくださった。ここから，ヴァーロシュマヨリ高校生との交流が始まった。ラウラさんのご両親，お姉さん，そして，３名のクラスメイトが温かく迎えてくれた。ラウラさんのご両親の別荘で自家製ワイン，ハンガリーの野菜炒め，普段口にすることのないものばかりをふるまって下さった。招待されたラウラさんのクラスメイトたちは，それぞれ，自宅でケーキやクッキーを焼いてもってきてくれていた。これが，ハンガリー流の思いやりである。お金をかけず，自分ができることをして，パーテイーに貢献するのである。食事の前には，庭で摘んだラベンダーで消臭袋を作ったり，２階に上がりラウラさんの部屋のベッドの上で，日本の歌手グループ“嵐”のポスターや雑誌を囲んで「どの子がいい？」などと楽しそうに話したりしていた。部屋には，ラウラさんの書道の作品や日本の品物などが飾ってあり，ラウラさんの日本好きな様子がよく伝わってきた。午後の半日の楽しい時間は，あっという間に過ぎてしまい，またの再会を約束して，お別れをした。

② 書道交流　＆　パラチンタ交流

半日ホームステイから始まったヴァーロシュマヨリ高校との交流は，次々に発展していった。まず最初に日本人学校中学生がマンツーマンで書道を教えた。さすがは，中学生だった。英語，ハンガリー語，日本語，ジェスチャーを混ぜて自分のパートナーにしっかりと教え，色紙に最高にきれいな一字を清書させていた。ちなみに，字は意味とともに中１生が予め選んでおき，その中からヴァーロシュマヨリ校生に選んでもらった。字の説明には，ハンガリー語を書き添えてあった。中１生のちょっとした工夫であるが，大切な工夫だった。この書道交流のお返しに，ヴァーロシュマヨリ校にて，パラチンタ（日本のクレープのようなもの）を一緒に作って食べるという企画をユーリア先生に考えていただいた。日本語でラウラさんとドミニカさんが作り方の説明を上手にしてくれた。その後，パートナーと一緒に作らせてもらった。中身はチョコ，スモモのジャム，カッテージチーズなどで日本のクレープとは少し異なっており，おいしくいただいた。

③ Ｖ校生７，８年生との折り鶴交流

ヴァーロシュマヨリ校生との交流の一方，隣の現地校との交流も進めることができた。きっかけは，以前より日本人学校や日本について取材をされてきたテレビ局レポーターのリチャードさんが日本へ直接取材をしにいくことになり，広島にも行かれることを聞いたことにあった。

日本全国より来ている生徒の日本の学校での平和教育の取り組みに差があったのは，当然である。そこで，英語の教科書に取り上げられている佐々木禎子さんや広島の原爆の教材を使用して，まず，私たち日本人が学習することから始めた。その後，Ｖ校の英語の先生方に相談し，Ｖ校生徒に日本人学校の生徒が，広島の原爆についてや，その被害にあった同年代の少女の話をし，さらに，その少女が自分の病が治るようにと願いを込めて折った千羽を越える鶴の話をして，千羽鶴を一緒に折っていこうと呼び掛けたのである。

Ｖ校の生徒と日本人学校の生徒が共通して理解できる言語は，ともに英語である。Ｖ校は４年生から週５時間，英語を学習しているが，おとなしい性格により活発には話さない。日本人学校の生徒も理解はできるが会話になると止まってしまう。話すべき話題があれば，それを一生懸命に伝えるだろうと思い，この取り組みを行った。Ｖ校の生徒は，英語の説明をとてもよく聞いていた。そして，鶴の折り方も学ぼうとしていた。中学生らしい交流が始まったなと実感した。その後は，逆にＶ校の英語の授業に招待されるなど，中学生の交流も活発になっていった。

【Ｖ校生徒との折り鶴交流会】

東日本大震災の際には，Ｖ校の先生方やハンガリーの方々にご心配いただいた。帰任のお別れの際には，記念にワインとレターをいただき，やっと両校の中学生の交流に橋がかかり始めたという印象を持つことができた。

４．最後に

どの国に派遣されても必ず，その国でしか学習できないことが必ずあるはずです。それを自身が見つけて，目の前の児童生徒に伝え，感じさせるのが我々の仕事だと思います。“その国でしか体験できないことを…”それが，私の３年間のこだわりであり，在外で学習する児童生徒のためにしようとしてきたことだった。最後に，在外教育施設でのこのような素晴らしい経験をさせていただく機会を与えてくださった皆様，そして常に健康面に気を配ってくれた家族に心から感謝したいと思う。